

パイデイア (Ⅲ)

— ギリシア文化を彩る理想の数々 —

教育者としてのホメロス

プラトンの告げるところによると、多くの人びとは当時、ホメロスこそはあまねくギリシアの教育者である、と信じていたらしい。このとき以後、ホメロスの影響は、ヘラスの境界をはるかに超えて広がっていった。プラトンは、哲学の立場から詩人たちをわけても熱烈に批判したのだが、そのような批判が成功したのは、詩の及ぼす教育的影響が一般に信じられているより遥かに狭いのだ、と例示できたからであった。けれども、このような攻撃もすべて、ホメロスの別格的な優越をゆさぶるには至らなかった。ギリシア人たちは常に、詩人こそは、もつとも幅広くもつとも深い意味で、人びとの教育者である、と感じていたのだが、ホメロスは、そうした一般通念の——唯一といってよい——もつとも高貴な手本であり、いうならば古典的実例であった。このことを額面通りに受け取らないで、ここにいう理想を、芸術のための芸術、といった近代的信仰に置き換え、ギリシアの詩へのわれわれの理解を狭めようものなら、とんでもない心得違いを犯しているといわざるをえない。そのような信仰は、ある時代の特定様式の詩と芸術ならそれなりに特色づけられ

G・ハイエット
村島義彦訳

ても、いまだ、偉大なギリシアの詩人たちの間にその顔を覗かせず、ゆえに、ギリシアの詩の研究に用いられてよいはずもなかったからである。初期のギリシア思想では、倫理的・道徳的なものと美的・芸術的なものは、いまだ明確に区分されず、そのような区分は、かなりのちに登場した。たとえばプラトンにしても、ホメロスの詩は、その告げるところが道徳的に真実でないと証明されたなら、即座に、自らの芸術的価値も下げるにちがいない、と考えていた。詩などは実生活の役に立たない、といった発想は、そもそものはじめ、古代における詩の評論家たちの間に登場したが、その詩を、純粹に美的・芸術的な基準に照らして評価するように最終的に人びとを教化したのは、キリスト教徒たちであった。この基準に照らして、人びとは、古典的な詩人たちの口にする道徳的・宗教的な事柄の大半を、一方では、神に背いた偽りの中身として強く退けながらも、他方では、かれらの作品の表立った要素の数々を、大いに教育的で芸術的にも喜ばしい中身として進んで受け容れたのであった。多くの詩人たちは、そのとき以来、異教の神話に登場する神々や英雄たちをせつせと呼び出してきたが、今日のわれわれはしかし、そのような神々や英雄たちを、詩的空想が生み出した単なる影絵的な「操り人形」にす

ぎないと考えている。当然ながら、ホメロスもまた、これと同じ狭い観点から眺められるかもしれないが、そうした場合、神話や詩がそもそものギリシア人に本当には何を意味したかなど、とうてい理解できないにちがいない。ヘレニズム時代の哲学的な批評家たちは、ホメロスの与えた教育的影響を要約しようとして、あるいは露骨な合理主義に依拠して「この話の教訓は〜である（ファブラ・ドークット）」などと語ったり、あるいはソフィストに従って、偉大な詩を、技術と知識がたつぷりと詰め込まれた百科事典の類いとみなして、われわれの不快感を誘ったのだが、このような学者ぶった発想は、本当の真実を墮落させたものでしかない。要するに、粗雑な手をへて——あらゆる美や真理もそうなりがちないように——粗雑化させられた結果にほかならず、われわれもまた、このような剥き出しの功利主義に触れて、かなり美的センスに反するな・・・と実感するのだが、それは、あくまでも正しい。どこまでも明らかなのは、ホメロスが——あらゆる偉大なギリシアの詩人たちと同じく——「文学史」という大行列の単なる一人物、をはるかに超えた存在という点であろう。かれこそは、ギリシア的な生き方を創り出し、ギリシア的な性格を造り上げた最初の、わけでも偉大な人物にちがいない。

詩一般は、ギリシアにおいて多大の教育的影響を及ぼしたけれども、これを論じようとすれば、以上の点に鑑みて、どうしてもホメロスを取り上げないわけにはいかない。ところで詩は、教育作用を発揮しようとするれば、人類に具わった美的で道徳的な潜在能力のすべてを存分に表明できていなくてはならない。詩における美的な要素と道徳的なその結び付きは、しかしながら、単に本質的な形態の次元に留まらず、多少とも、付随的な素材の次元にまで及んでいた。芸術作品にみられる教育的な中身と美的な様式は、互いに密接に影響し合っていたが、実のところ、同じ根に端を発している。そこで次に、様式や構造など、あらゆる意味

での「形態」がもつ美的な効果が、どれほど自らの理智的で精神的な中身に条件付けられ、かつ浸透されているかを提示してみよう。そうはいっても、この点を、美的な一般法則として定立などできない。人生の中心問題に目をつぶり、効果という点では、ひたすらその様式に依拠するタイプの芸術がこの世には明らかに存在するし、これまでも常に目にされてきたからである。事実、芸術家の中には、気高くて偉大なテーマのすべてを故意にあざ笑うか、あるいは、主題の選択になど無関心をよそおう連中もいないわけではない。もつとも、そのような軽薄ぶった芸術でも、それなりの倫理的效果は具えていて、たとえば、因習のごまかしを容赦なく暴いて、その時代の道徳的・美的な景観をしっかりと浄化してくれたのは否めない。けれども詩は、本当の意味において教育効果を発揮しようとするれば、すべからず、人間の魂の深みに根を下ろさないわけにはいかない。すなわち、道徳的な信条、熱情に溢れた精神、人を動かさずには措かない幅広い人間性の理想、等々を体現しないわけにはいかないのである。そして、ギリシアの詩の中でもとりわけ偉大なものは、任意に選ばれた人生の断面図を単に示す以上のはたらきをなした。すなわちそれは「真実」を語ったのであるが、その真実はあくまでも、特定の理想に関わらせて選ばれ、かつ提示されたのである。

そうした一方で、最高価値の数々が永続的な意義を手にし、人類を動かす絶大な力を得たのは、通常、芸術的な表現を介してであった。芸術には、人間の魂を一転させる限りない力——ギリシア人たちは「プシユカゴギア（魂を導くもの）」と命名した——が具わっている。というのも、ひとえに芸術のみが、教育的影響を成り立たせる二つの本質条件、つまりは、普遍的な意義と直接的な訴えの双方をしっかりと兼備していたからである。人間の心に働きかけるこれら二つの条件を兼備することで、芸術は、哲学思想と現実生活のいずれをも凌駕していた。たとえば現実

生活は、なるほど、直接的な訴えの点で優れてはいても、そこでの出来事の数々には、普遍的な意義が大きく欠けていた。そうした出来事には、あまりにも多くの非本質的な付属物がこびり付いて、ゆえに魂に対し、本当に深く永続的な印象を刻み込めなかつたからである。これに対して、哲学や抽象的な思想は、なるほど、普遍的な意義の面ではまことに申し分がない。これらは、ただひたすら事物の本質を問題にするからなのだが、その一方で、自分自身の体験に訴えながら、それらに、個人生活の活力と勢いを吹き込めるような人間を別にすれば、その他の誰にも「活き活きと働きかけることはない。そのようなわけで、詩には、抽象的な理性の説く普遍的な教えをも、さらには、個人的な体験世界の偶発的な出来事をも共に凌ぐすぐれた利点が具わっている。すなわち詩は——アリストテレスの有名な警句をより広い意味で用いるなら——実生活に比べていっそう哲学であり、しかも、哲学に比べていっそう実生活的——自らの圧縮された精神的現実性のゆえに——であるのである。

ここにみた観察は、あまねく時代の詩に広く当てはまるわけではない。それどころか、ギリシアの詩全体にすら当てはまらないのである。そうした事情は、ギリシアの詩に狭く限られたものでもないのだが、この観察は、あくまでもギリシアの詩を土台にしていて、ゆえに、他の国民の文学によりは、ギリシアの詩にいっそう深く当てはまった。この観察は、実のところ、プラトンとアリストテレスの時代に展開された見解の再現にはかならない。かれらの生きた時代、ギリシアの美意識は、ついには自らの力と活動の領域に目覚め、詩人たちの偉大な業績に研究の目を振り向けた。細かい点での多くの温度差にもかかわらず、そこでの芸術観は、のちの時代にも、基本的には同じ形でしっかりと保持された。われわれとしては、詩に対する——さらには、詩における固有にギリシア的な性格に対する——豊かな感受性に彩られていた時代に生まれたこの芸

術観が、ホメロスにどの程度まで当てはまるかを、しっかりと見定めなければいけぬ。これの歴史的な正しさを明かすためにも……

ホメロスの時代の発想の数々は、ホメロス本人の作品を介して、他のいかなる時期の発想にも遙かにまさった永遠性と普遍性を手にし、それゆえ、その文化的影響もいっそう永続的で幅広いものであった。『イリアス』と『オデュッセイア』という偉大な叙事詩は、ギリシアの掲げる文化理想が文句なく無比である点を、他のいかなる詩よりもはっきりと示している。ギリシア文学の手で編み出された様式は、そのほとんどが、他の言語や文明の中に比肩すべきものをもたない。悲劇、喜劇、哲学論文、対話篇、科学の手引き、吟味の歴史、伝記、法廷用・政治用・儀式用演説、旅行記、追想、書簡集、自伝、回想録、随想——こうしたタイプの文学はすべて、ギリシア人の手で生み出され、われわれに伝え残されてきた。とはいえ、他の国民であつても、同じような発展段階にあれば、社会構造や貴族的理想の点で、さらには、そうした理想を表明した素朴な英雄詩をもつ点で、初期のギリシアに似ていないわけでもなかつた。事実、多くの他の国民たちが、ギリシア人に倣って、自らの素朴な物語詩を素材にさまざまな叙事詩を作り上げてきた。インド人しかり、ドイツ人しかり、ロマンス語系の人々しかり、フィン族しかり、中央アジアのあまたの遊牧民しかりである。われわれはだから、数多くの民族や文明の手にする叙事詩を比較する中で、ギリシアの叙事詩がもつ固有の特性を抽出できるにちがいない。

ところで、これらの叙事詩については、しばしば「こう確認されてきた。そうした叙事詩はすべて、いうならば「同じ文化段階」で生み出された以上、類似する点を多く具えている」と。ギリシアの叙事詩でも最初期のものは、基礎的な特徴の点で、他国の叙事詩によく似ていた。もつとも、似ていたのは、基礎的な特徴においてのみで、つまりは、外的で一

時的な面に限られていて、豊かな人間性と芸術的な完成度では格段の差が認められた。ギリシアの叙事詩は、深さと豊かさの点で比較を絶して、そこには、あの英雄時代——ブルジョワ的な「進歩」も断じて壊しえない——の所産である真理と運命をめぐる永遠の知識がしっかりと表明されていた。ドイツの叙事詩でさえ、あまねく高貴さを具えながらも、深さと永遠性の点で、とうてい『イリアス』や『オデュッセイア』に肩を並べることはできない。中世の叙事詩が占めた歴史的な位置とホメロスのそれがどれほどに隔たっていたかは、次の事実が、何よりも示してくれるにちがいない。すなわち、ホメロスの方は、たつぷりと千年にわたってギリシア文明にその影響を刻み続けたけれども、中世におけるドイツやフランスの叙事詩は、しかしながら、騎士道が衰退すると間もなく忘れ去られたからである。勉強熱心なヘレニズム時代にも、ホメロスの叙事詩はやはり生き残って、まったく新しい学問を生み出した。すなわち、文献学がそれで、この学問は、ホメロスの叙事詩の起源とその伝播の秘密を何とか解き明かそうと努めて、当の詩の溢れる活力に自らの生命の泉を求めたのだった。これに対して、『ローランの歌』『ペアウルフ』『ニーベルンゲンの歌』などの中世叙事詩は、近代の学問が、長きにわたる研鑽を重ねた末に、古い原稿に埋もれた灰色の忘却からようやくに救い出された。中世の叙事詩の中で、単に自国だけでなく、ひいては全人類の生活の一部ともなった唯一のものを挙げるなら、おそらく、ダンテの『神曲』を描いてないだろう。そして、『神曲』がこの地位に昇りつめたのは、ホメロスの叙事詩と同じ理由による。『神曲』そのものは、自らの時代に固有の口調で語っているけれども、そこに盛られた深い人間性と広い人生の知識は、おのずと、偉大な高みにまで当の作品を導き上げていったからである。これと肩を並べうるのは、英国なら、遙かのちのシェイクスピアか、ドイツなら、遙かのちのゲーテぐらいであ

ろうか。いかなる人々でも携えている素朴な詩には、実のところ、民族的な特性が強く刻み込まれていて、およそ例外はありえないから、他の民族やのちの時代が、そうした詩を存分に味わって正當に評価するなど、きわめて困難というほかはない。初期の民族詩は、最も広い人間性に達して、これをわが内に組み込んで始めて普遍的な意義を手にできた。ギリシアは、人間生活を形造っている諸々の基本要素——まことにリアルですべてを包括する——をしっかりと見分けて、これを見事に再現する固有の力を具えていたから、ホメロスも、ギリシア史の発端に屹立しながら、全人類の教師となりえたのである。

ホメロスは、われわれにとつて、ギリシアの初期文化を代弁する典型にはかならない。すでに論じておいたように、かれの価値は、ギリシアの最古の社会がいかにあったかを告げる歴史的証人という点にあった。とはいえ、かれの手で描かれた古代の騎士的世界の不滅の光景は、ありのままの現実を芸術の中に思わず知らず描き込んだ、といったレベルを超えて出ている。ホメロスの叙事詩は、気高い伝統と厳しい基準にあふれた貴族社会の中に、いつそう高次の精神生活がきらめいているのを見逃さなかった。叙事詩そのものも、このような精神生活に濃く彩られていた。たとえば、『イリアス』を精神的に駆り立てていたのは、戦闘の場で英雄的に死のうぐいした激しいパトス(情熱)であったし、『オデュッセイア』に生彩を与えていたのも、貴族的な文化や道徳の形で紹介される、人間らしい性格であった。そのような精神生活を導き出した当の社会は、歴史に跡形も留めないで淋しく死に絶えるほかはなかったが、この社会を活写した肖像の方は、ホメロスの作品を介して、あまねくギリシア文化が奉じる理想の基盤という地位をいささかも失っていない。ヘルダーリンはかつて、「この世で存続するもの、それは、詩人の作品を措いてない」と口にしたけれども、このセリフはいみじくも、ギリシア

教育の歴史を支配する法則を言い表していた。ギリシア教育の成長して止まない構造を築いたのは、ほかでもない詩人たちであって、ギリシアの詩は、その段階を昇るにつれ、いつそう筆致を確かなものにしながら、自らの教育意図を成就していったからである。この点については、あるいはこう問われるかもしれない。ホメロスの叙事詩は、ひたすら客観的な叙述に徹していたから、それでもあえて、このような意図を共有していると言われてよいのだろうか、と。これについては、先に「アキレウスへの使い」や「テレマコスの冒険」を分析した折に、具体例をいくつか挙げて、これらの箇所教育意図が抜きがたく認められる点をしっかりと証明しておいたが、ホメロスの教育的価値は、しかしながら、そうしたレベルをはるかに超えた普遍的なもので、しかしかの教育問題を事細かに論じているとか、倫理効果を生み出そうと腐心する箇所をいくつか具えている、などに限定されるわけではない。ホメロスの叙事詩は、人間精神が生み出した広大で錯綜した作品にほかならず、これ自体を、単一の定式できれいに査定できるはずもなかった。そこには、すでに示したように、教育への率直な関心を表明した比較的のちの章に並んで、まるで異質の本性に彩られた箇所もたつぷりと含まれていた。すなわち、詩人の目が、記述する対象にひたすら注がれて、その底に横たわる倫理意図などまるで読み取れないような箇所である。たとえば、『イリアス』の第九巻とかテレマコス物語などは、知的・精神的でありながらも、はるかに主観的な姿勢でたつぷりと溢れていて、自らの効果を生み出そうと意識的に努めたあげく、結果として、哀歌詩（エレジー）に限りなく近づいていた。われわれは、それと意図された教育的な箇所を、そうした意図を排した世にいう「客観教育」から、すなわち、当の詩人にも把握されないうで叙事詩の中に暗に示された教育効果から、しっかりと切り離さなくてはならない。そして、このような教育効果に思いを巡らそうと

すれば、おのずと、叙事詩のそもそもの発端にまで遡らないわけにはいかないのである。

ホメロスは、古い時代の吟遊詩人——かれらの作品から叙事詩も生まれた——がいかにあったかの姿を、いくつかわれわれに提示してくれる。吟遊詩人の使命は、人々や神々の栄えある行為を、後代にまで残し伝える点にあった。そのような栄光を保持し増大させること——これが、英雄詩のそもそもの狙いにほかならず、この詩はだから、しばしば、さまざまな言葉に訴えながら、つまりは「人びとの栄光の数々」という風に叙述されてもいる。ホメロスは、一流の名をこよなく愛したから、『オデュッセイア』の第一巻に登場する吟遊詩人を、あえてペミウスと名付けている。ペミウスは、直訳するなら「広く報道に携わる人間」とか「名声の語り手」を意味したからである。ちなみに、デモドコスというパイアークス族出身の吟遊詩人の名は、暗に、当人が試みる「公表」の意味を含んでいた。吟遊詩人は、広く名声を語り伝えることで、社会に確固とした地位を築いていた。プラトンは、詩人の味わう恍惚（エクスタシー）を「神からの狂気」がもたらす美しい効用の一つに数えあげ、そのような歓喜を、ざっと次のように記述している。「ミューズの神々が憑依したこの狂気は、穏やかで上品な魂に侵入して、これを覚醒させ、さまざまな歌やあらゆる詩で魅惑する。そして、古えの人々が刻んだ無数の行為を讃えながら、後の世代を教育するのである」と。これこそは、ギリシアにおける詩の本来の理想にほかならない。この理想に立って、詩と神話（＝古えの人々の偉大な行為の伝承）は、切っても切れない生来の絆で固く結ばれていたから、詩人の社会的機能——教師としてのの、さらには、ある意味で「社会の構築者」としての——も、つまりは、この理想から導き出されたといつてよい。プラトンはしかし、詩人が、しっかりと意識して聴衆に影響を及ぼそうと努めている、などと信じない。詩人は、

どちらかといえば、過去の栄光を後の世代に語り伝えて保持するという直接の営みを介して、間接に、世の聴衆を教育していたからである。

ここで、ホメロスに登場する貴族たちが、道徳をめぐっていかにも「実例」を必要としたか、という先の論議を思い出してみよう。そこで指摘されていたのは、神話から得られた実例が教育的に大きな意味をもっている点であった。たとえば、ポイニクスはアキレウスに、アテナはテレマコスに、あるいは警告しあるいは励ますにあたり、そのような実例をせつせと持ち出していた。神話は、用いられる実例や対比がたとえ不注意に選び出された場合でも、持ち前の矯正力をいささかも失わなかった。それは、人生に対する鑑として機能したのである。それも主として、伝承的事象を持ち出して日常的出来事に対比させるのではなく、あくまでも自らの本性に訴えて「鑑」となったのだった。あまねく過去の伝承は、ひたすらに栄光から、すなわち、偉大な人々の刻んだ気高い行為の報告から成り立っていて、何気ない些事などまったく含んでいなかったからである。常でない事柄は、単に記述されただけでも、また、単に是認されただけでも、それなりの強制力を具えているのだが、吟遊詩人は、常でない事柄を記述するのみでなく、さらに、この世界で称賛するに足る事柄（「常でない事柄」）を忘れずに称賛もしたのである。ホメロスの英雄たちは、自らの人生を通して「榮譽」という当然の報酬を、あるいは相手から受け取り、あるいは相手に報いる営みに多大の汗を流したけれども、ここに見られるように、本来の意味での英雄的行為はすべからず、不滅の榮譽をひたすらに熱望した。神話と英雄詩こそ、国民にとって、偉大な実例にあふれた無尽の宝庫にほかならず、国民はそこから、自らの理想を、そしてまた日常生活の基準を次々と汲み出した。叙事詩と神話のこうした結び付きは、たとえばホメロスが、誰かと誰かの間で、助言・警告・勸奨・励まし・命令などの営みがくり返される場合のすべて

に、しっかりと伝承的な実例を用いている点からも裏書されるにちがいない。そのような実例はしかも、意義深いことに、語りの部分でなく、常にセリフの部分で用いられていた。登場人物たちがあえて神話に訴えたのは、それが、権威ある実例の集まりであったからで、神話には、どこにも適用できる偉大な力が具わっていた。それは、なるほど歴史的な出来事の本霊（「蒸し返し」）に間違いはなかったけれども、だからといって、単なる事実の寄せ集めなどでなく、まさに、後の世代の空想の中で果てしなく伝えられつつ保たれて、ついには、英雄的な巨大さにまで昇りつめた出来事の集積にほかならない。ギリシアの文学史を貫いてみられる不変の法則ともいふべき、詩と神話のこのような緊密な結びつきは、それゆえ、しっかりと論議されてよいのだが、これ自体が生じたのは、詩の起源がいわゆる英雄物語にあつたからで、つまりは、偉大な英雄たちを褒め称え、これを模倣しようとする栄光の理想にあつたからであった。その不変の法則は、しかしながら、高次の詩の領域外にもあまねく適用されたわけではない。われわれが目に見えるのは、せいぜい、他のジャンル——たとえば抒情詩——のあちこちに神話的要素が導入され、平凡な素材を高貴化し理想化している姿ぐらいであろうか。対して、叙事詩が描くのは完全に理想の世界であつて、神話は、初期のギリシア人にとって、そのような理想化を凶る最上の要因にほかならなかった。

神話の影響は、はつきりと目にできるように、叙事詩の様式や構造のあまねく細部にまで及んでいた。たとえば、叙事詩の用語を特徴づけるものに、型にはまった装飾的な形容辞の多用があるけれども、このような多用は、直接には、古えの「英雄たちの栄光」の精神そのもの由来していた。英雄詩が辿った長い発展の頂点に位置する偉大な叙事詩では、これらの形容辞も、しばしば化石化していたが、それでもやはり、叙事詩のしきたりに従って用いられないわけにはいかなかった。しきりに用

いられた個々の形容辞は、それ固有のリアルな意味を伝えるためではなく、大半が、単なる「お飾り」にすぎなかったのだが、それでもやはり、何世紀にもわたる叙事詩的伝統の欠くべからざる要素であり続けた。そのような伝統は、それ自体が不適切となり、実際には有害となった場合でさえ、しばしば強い力を失わなかったからである。叙事詩は、手に触れるすべてを理想世界に高め上げたが、形容辞は、そうした理想世界を構成する家具の一部と考えられてよいかもしれない。ざっとこのように、形容辞の使用もそれなりに効力は具えていたのだが、叙事詩の様式はしかし、高め上げ、高貴化し、美化するその力を介して、これにまさる効力を発揮した。叙事詩の記述や描写には、これに該当した崇高さが随所に認められるにちがいない。低俗で、卑しく、醜いような事柄はすべて、叙事詩の世界から洗いざらい追放された。ホメロスの手で、すべてが——ごく平凡な事柄や一般的な出来事ですら——いかに高次の地平に運び上げられたことか、古代の人びとは、わが目でこの点を確認した。プルサのディオという修辞家は、叙事詩の崇高な様式と美点の称賛がいかに深く結び付いているかの必然性に、とうてい十分には気付けなかったから、あるうことかホメロスを「あら捜し屋」のアルキロコスに対比して、こう語った。人びとはむしろ、称賛よりも非難を必要としているのだ、と。このような見解は、ここでは、われわれの関心をそれほど惹かない。そこには、古えの貴族社会における教育的原則と偉大な実例の崇拜にあらさまに異を唱える、まぎれもない悲観的姿勢が如実に表明されていたからである。ただし、アルキロコスの社会理想については、ホメロスにみられる気高さの理想と大きく異なっているだけに、のちに、論究の機会を設けるとしよう。ディオ自身は、美的な事柄への繊細な審美眼を具えていたから、叙事詩という様式のあからさまな本性と、手に触れるすべてを仰々しく飾り立てるその傾向を見事に記述して、こう語った、

「ホメロスは、動物であれ植物であれ、水であれ土であれ、武器であれ馬であれ、ほとんどすべてを称賛した。何かの傍を通り過ぎる時には、ほぼ例外なく、それを称えて美化しようと試みた。かれが罵った唯ひとり人間、すなわちテルシテスをすら、この詩人は、あるうことか「よく通る声の語り手」と呼んでいるのである」と。

叙事詩は、およそこのように、物事を理想化する自らの性向——古えの英雄歌に端を発する自らの出自にも深く結びついた——を介して、他のあまねく文学ジャンルからきっぱりと区分されるにちがいない。叙事詩はしかも、こうした性向のおかげで、ギリシアの教育史上に卓越した地歩を築けたのだった。ギリシアの文学はすべからず、人間ならではの自己の表出というごく自然な様式にその源を仰いでいた。かくして、抒情詩なら民謡の初期の姿が変更され、精錬され、完全化されて生まれ、イアンボス調ならディオニュソスの祝祭で撒き散らされる儀式的毒舌から、賛歌や行進頌なら宗教儀式から、祝婚歌なら公の婚礼式典から、喜劇ならコモスの酒盛りから、そして悲劇ならディテュランボスからそれぞれに発展したのだが、このような後の詩のジャンルが導き出された元の原型は、およそ三つに区分されるだろうか。すなわち、神々の崇拜に関わるもの、個人生活に関わるもの、そして、社会生活に関わるものがある。ところで、個人生活とか宗教的慣行（＝神々の崇拜）に由来したタイプの詩は、何はともあれ、ほとんど教育に関わらないけれども、英雄詩はしかし、目ざすところがあくまでも、英雄的理想を創造しこれを恒久化することにあつたので、おのずと教育面での狙いもその影響も、あまねく別のタイプの詩に比べて遥かに大きなものとなった。そこには、目標とすべき全体的な人生像が与えられ、運命と闘って見事な勝利を得ようと努める人物像が描かれていたからである。教訓詩と哀歌は、叙事詩の敷いた道にきっちりと従ったから、ともに、様式の面で当の叙事詩

にひたすらに似て、しかも叙事詩から、そもその教育精神も受け継いで、この精神はのちに、イアンボス調やコロス（合唱隊）など別のタイプの詩にも伝えられていった。悲劇もやはり、自らの伝統的な素材と倫理的・教育的な精神を、二つながら、その起源であるディオニュソスの祝祭からでなく、あくまでも叙事詩から継承していた。われわれがもし、わけても大きな影響を教育的に及ぼした散文というタイプの文学——たとえば歴史や哲学論文など——は、叙事詩の示した哲学的仮説と思想的な葛藤をくり広げる中で生まれたと考えるなら、叙事詩こそ、高次のギリシア文学のすべての源であると主張して、まことに正当と感ぜられたいしかるべきだろう。

ところで、これに続くところの、叙事詩の内部構造に生きてはたらく教育的要素を何とか浮かび上がらせるという問題には、ざっと二つの接近方法があるのではないだろうか。その一つは、当の叙事詩を現にあるがままに吟味する道であって、ここでは、叙事詩は「完全な全体」として扱われ、学問的検討から得られた結果にも、さらには、そこから提示された問題にもまるで注意が払われない。もう一つは、叙事詩の起源を読み解いていく道なのだが、これはしかし、起源をめぐる仮説があまりに多くて、ほとんど救い様もない程に塞がれている。双方の道はだから、ともに通行不能というほかほかなく、選ばれてよいのは、ちょうど中間に位置する第三の道ということになる。そこでは、叙事詩の歴史的發展もしかるべく考慮に入れられるだろうが、その際、批判的分析が導き出した結果の数々に触れないわけにはいかない——目下の考察のあまねく細目にしつかりと働きかけていたから——などと感ずる必要はない。まったくの不可知論者であつても、叙事詩の前身とその起源をめぐるあからさまな事実には、やはり「否」は唱えがたいからである。この点では、われわれと古代の人びとの間に明らかな差があつた。かれらは、ホメロ

スの教育価値を論じるにあたり、つねに『イリアス』全体と『オデュッセイア』全体を一括りに考えてそうしたけれども、われわれは、必ずしもそうしていかないからである。今日の解釈家であつても、むしろ、双方を一つのまとまりと考えるように努めなくてはならないし、これは、たとえ分析そのものが、双方のまとまりなど後代の創作にすぎず、伝承的素材の無尽の塊に向かつて詩作活動が何世代もかけて流した汗の所産でしかないと告げるにしても、やはりそうなのだが、かといってしかし、これらの叙事詩が成長の過程で、英雄譚的素材に対する古い説明を吸収し、これを改変したばかりでなく、さらに加えて完成の時点でも、後代の手になる箇所をそっくり取り込んで挿入した、という可能性はたえず頭に刻まれてよいだろう。それゆえ、叙事詩の成長と完成の諸段階は、できるだけ明瞭にかつ分かり易く描き出されなくてはならない。

ところで、叙事詩の發展を解き明かそうと努めるわれわれの研究は、もちろん、初期の英雄詩がいかなるものであつたかをめぐって、われわれが抱くイメージの本身に大きく影響されないわけにはいかない。もしかりに、叙事詩はまことに古い英雄歌——多くの国々でも最初のタイプの文学——にその端を発していると思ひ描くなら、叙事詩の最も古い様式は「アリストイア」、つまりは武勇譚であると想像しないではいられない。そこでは有名な英雄が、強力な敵と激しい格闘を演じ、ついにはこれを打ち負かすという基本の筋が展開されていたからである。われわれには、単一の戦士の偉業の方が、一般的な戦闘場面よりも遙かに深い関心を惹いたのだが、これも無理はなく、戦闘場面は、すぐにボンヤリと分かり難くなつて、それが本当に胸を熱くさせるのは、ひとえに、偉大な英雄たちが活躍する挿話の中以外になかつたからである。われわれの共感、集団的な戦闘によりは、むしろ個人的な決闘に際して呼び覚まされた。決闘そのものは、いっそう個人感情に訴え、登場人物の相互作用

用をより明らかにし、さまざまな出来事と動機をはるかに深く一体化させていたからである。偉大な戦士に著しい武勇の記述は、つねに、力強い教育効果（『プロトレプティック効果』）を具えていて、叙事詩の定型に基づいて創り出された類似の挿話は、それゆえ、のちに歴史作品にも登場している。『イリアス』では、武勇こそが行為の頂点に座を占めていた。武勇は、それだけで自己完結した場面を形成し、ある意味では、叙事詩の主たる筋からも独立していたが、このことは、そもそも何を告げているのだろうか。ほかでもない、武勇は、かつては叙事詩から完全に切り離されていた、あるいは、まるきり別の独立した物語をモデルに仰いでいた、という点に尽きるのである。『イリアス』の詩人は、それゆえ、トロイを前にした戦いの物語を切り分けて、アキレウスの憤りとその帰結を、そしてまた、一連の重要な挿話の数々——たとえばディオメデスにみる（第五巻）、アガメムノンにみる（第一巻）、メネラオスにみる（第一七巻）武勇の数々、さらには、メネラオスとパリスの（第三巻）、ヘクトルとアイアコスの（第七巻）決闘など——を導き出すことができた。これらの場面こそ、民族の栄光であり喜びであって、英雄歌もこれに向けて歌われ、まさしく、民族の理想をそのままに反映していた。

叙事詩は、一連のこうした挿話群を結び合わせて、ある活動のまとまりに仕上げたのだが、これこそ、この詩の手で達成された芸術上の新たな業績にほかならない。叙事詩は、あまねく有名な英雄たちを一つの巨大なドラマの配役に割り振ったけれども、古い物語歌は、一般的な筋書きを知的に想定して、個々の挿話をあれこれと関係づけたにすぎないから、前者は、明らかに後者を凌いでいた。詩人は、初期の物語歌が褒め称えるあまたの登場人物や出来事を結び合わせて『トロイ戦争の物語（『イリアス』）』という巨大な全体を作り上げたわけで、そこには、この戦争を当人がどう捉えているか、がそれとなく示されていた。すなわちかれ

は、これを、不滅の英雄たちが最高のアレテー（徳）を求めて激しく繰り広げる闘争、と捉えたのだった。ここにいう英雄たちは、狭く、ギリシアの英雄一般に限られる必要はない。かれらの敵もやはり、自らの自由と祖国を守るべく懸命に努める国民に変わりはなかったからである。「何よりも一番なのは、おまえの家のために戦っている、という兆しなのだ」——これはホメロスが、ギリシア人の英雄ならぬ、最も偉大なトロイの英雄の口から呟かせたセリフである。この英雄は、トロイのために戦って斃れたのだから、それだけいっそう深くかつ本当に人間らしくった。ように思われる。偉大なアカイアの戦士たちは、さらにいっそう英雄的資質に溢れていた。国への愛も、妻子への愛も、かれらを駆り立てる動機としては希薄で、むしろ、ヘレネの誘拐にしかるべく報復してやろう、という意図がそこで言及されている。そして、奪われた妻を本来の夫の元に連れ戻すにあたり、一般的な流血を避けて、穏やかな外交的話し合いに訴えようとも努められているのだが、そのような理由づけは、とうてい重要とはいいがたく、アカイア軍の中で詩人の関心を惹いたもの、それは、軍が編成された発端の正当性などでなく、あくまでも、英雄たちのみせる惚れ惚れした才気の方であった。

争い、武勇、死などが目まぐるしく入れ替わる背景の前面で、ある運命的な悲劇が勃発する。すなわち、英雄アキレウスの悲劇がそれで、かれの物語は、詩人が、それに続く戦闘の数々を寄せ集めて一つの詩的なまとまりに仕上げるための、まさしく紐帯の役割を果たしていた。アキレウスの悲劇は、『イリアス』自体を、はるかな日々とかつての戦闘を伝える単なる神々しい面影の身から救い上げて、それを、人間の手で営まれる生活と人間がこうむる不幸をしっかりと刻んだ不滅の記念碑にまで導いたのだった。叙事詩は、途方もない視野と驚くべき展開の複雑さを一体化したような、まことに見事な詩を作り上げる技巧上の前進をただ

単に物語るばかりでなく、そこには、人生とその諸問題に向けた新しくてより深い観点も、すなわち、英雄詩を本来の地平からはるかに高め上げ、詩人に、最高の意味での「教育者」という新たな地位を付与する、いつそう徹底した省察もきつちりと含み込まれていた。詩人はいまや、過去の偉大な行為をほめ称える、単なる没個人的な「名声の語り手」などでなく、言葉の十全な意味において「詩人」であった。かれは、後世に残る物語を生み出して、これに見事な解釈を施したのであるから……

芸術作品を生み出すのと、これに精神的な解釈を加える行為は、そもそもその根底においてその根を同じくすると考えなくてはならない。ギリシアの叙事詩は、全体的なまとまりをこしらえ上げる技巧の点で大いに独創的であり、途方もなく優れていたのだが、それは実に、この詩の教育効果が導き出される所以のものと根を同じくして、つまるところ、人生の諸問題をいつそう深く自覚する点に求めることができた。おびただしい素材の山を立派に料理するという喜びはますます高まって、これ自体は、ギリシア人のみならず他の国民にあつても、叙事詩の最終的な発展段階をしっかりと特徴づけていたのだが、それはしかし、必ずしも常に、偉大な叙事詩を仕上げる技巧の練磨に導いたわけではない。このような最終段階で長編の詩が生み出される時ですら、それは易々と、まともでない歴史物語に退化していった。すなわち、「レダと産まれた卵」のセリフに始まり、英雄たちの誕生から古い伝承説話の退屈きわまりない連続に繋がっていく、例のあれである。ホメロスの叙事詩はしかし、集中を切らさず、活力にあふれ、劇的な展開を失わなかった。すなわち、ひたすらに「事の只中に（イン・メディアス・レス）」突入し、主たる筋書きをたえず鉄床上に置いて、短くて鋭い鉄槌をくり返し落としたのだった。それは、驚くべき知覚の才に訴えて、トロイ戦争全体の顛末や、アキレウスの生涯のすべてを、あえて語り尽くさないうまく方向を選んだ。

それが紹介したのは、まさしく危機のみで、要するに、ありとあらゆる戦闘や、過去・現在・未来のさまざまな運命をたつぷりと盛り込んだ約一〇年に及ぶ戦争を、ごく短時間で再現するような代表的瞬間でしかなかった。古えの批評家たちは、そうした選択に注目して、これを大いに褒め称えた。アリストテレスにしても、さらにはホラティウスにしても、そうした選択のゆえにホメロスを、第一級のすぐれた叙事詩人と呼んだばかりでなく、さらに加えて、詩的な力とその熟達の最高の手本とまで呼んだのだ。この選択を介して、ホメロスは、単なる歴史から顔を背け、出来事からその具象性——つまりは事実の殻——を剥いで、これを新たに再生し、当の出来事を彩った問題の数々が、自らの内なる駆動力に訴えてどのように展開していくかを、ありありと提示できたのである。

『イリアス』は、大きな山場でその幕を開けた。アキレウスは、激しい怒りに駆られて戦場から身を引き、ゆえにギリシア軍は、抜き差しならない窮地に陥っている。数年にわたる戦いをへて、さまざまに刻まれたあらゆる働きの報酬は、人間の愚かさに端を発する不当な扱いのせいで、手に入る直前にスルリと逃げ落ちてしまった。ギリシアの英雄たちは、最大の戦士に去られてのちも、以前に数倍した激しい戦いをくり広げて、自らの武勇を十全に発揮したのだが、敵方もまた、アキレウスの不在に励まされて、アカイア軍に全力で当たり、勝利の雄叫びと共にこれを戦場から追い払い、いつそうの圧迫を加えたから、とうとうパトロクロスが、そのような窮状を見かねて救援に赴いた。けれどもかれは、ヘクトルの手で斃され、ついにアキレウスが参戦を決意したが、それは、ギリシア軍のたつての願い出や償いの申し出に心が動いたからではない。斃れた友の仇を討つために、かれは再び参戦し、ヘクトルを切り殺し、ギリシア軍を破滅から救い出し、旧来の野蛮な哀悼儀式に則ってパトロク

ロスを埋葬し、友と同じ運命が自らの上にも忍び寄るのを目にするのだった。プリアモスが、息子ヘクトルの遺体を貰い受けたいと嘆願して、アキレウスの面前の土間にひれ伏した時、さしもの当人の無慈悲な心もしかるべく和らいで、ついには涙を流すことになった。自らの年老いた父が、プリアモスのように、実の息子に先立たれて悲しむ——アキレウス当人はむろん生きていた——姿をそっと思い浮かべたからである。

アキレウスの恐ろしい怒りは、スキのない筋書き全体の芯をなしている、詩を通して当人の姿を包み込んでいたまばゆさの中で、ひとときわ赤々と燃え盛っていた。かれこそは、人間を超えた強さと勇氣に溢れながらも、早すぎる死と直面する若き英雄にほかならない。かれは、平穏と喜びに満ちてはいるが長々とした不名誉な人生よりも、英雄的な栄光に向けた短くて険しい登攀をわざと選び取った、本当の意味での「メガロプシユコス」——高潔な人間——であったから、おのずと、展開された戦績にふさわしい唯一つの報酬——英雄としての榮譽——を奪い去って憚らない強力なライバルに対して、どうしても膝を屈するのを潔しとしない。叙事詩がその幕を開けるや、輝くかれの顔は、憤りで暗く翳っていたし、叙事詩の結末もまた、武勇が勝ちを収める通常の終幕とかなり異なっていた。アキレウスは、ヘクトルを打ち負かしても喜びを覚えない。こうして、偉大な物語は静かに幕を下ろすのだが、そこには、慰める術のないアキレウスの悲しみと、パトロクロスを偲んでギリシア人たちが漏らす、さらにはヘクトルを偲んでトロイ人たちが漏らす鳥肌の立つような悲嘆と、そしてまた、勝ちを収めたアキレウスがうつすらと自らの死の避けがたさを予見する姿のみが残されていた。

数ある批評家の中には、叙事詩の本体を、そうした最後の巻から切り離したり、あるいは逆に、アキレウスの死に繋げようと欲する者もいないわけではない。かれらは実に、本来の『イリアス』は「アキレウス物

語」であった——あるいは今日ではそうあるべきだ——と信じているのである。これはしかし、美的な観点よりは歴史的な観点から『イリアス』をながめ、さらには、様式や芸術上の諸問題——当の詩が面と向かって解こうとした——よりは自身そのものに着目していたからなのだが、そもそも『イリアス』は、トロイ戦争における最高の武勇、つまりは、強力なヘクトルを打ち負かしたアキレウスの勝利が、いかに煌びやかであったかを褒め称えながら、死という運命を背負った英雄たちの避けがたい悲劇を、お互い同士での、あるいは運命とのひたむきな格闘のパトスと見事に混ぜ合わせていた。本当の武勇は、英雄の勝利をのみ口にして、当人の破局など口にしない。アキレウスは、斃れたパトロクロスの仇を討つべく見事ヘクトルを打ち負かしてやろう、と固く心に誓ったのだが、それが成就した暁には、自分の生命も直ちに無くなるのを承知していて、ゆえに、この決意には深い悲劇が潜んでいた。その悲劇はしかし、いわゆる破局に向けて展開せず、アキレウスの勝利の煌びやかさを引き立たせる暗い背景として『イリアス』では用いられている。アキレウスの掲げるヒロイズムは、古えの戦士たちの単純に狂暴な蛮勇からは程遠く、自らの生命と引き換えに偉大な行為をあえて選び取る中でその絶頂を迎えた。のちのギリシア人たちはすべて、当人の人格のそうした点に賛同して、ここにこそ、叙事詩の倫理的・教育的な価値がわけても物語られている、と指摘した。注目してもらいたいのは、アキレウスの英雄的決意をめぐる悲劇が、当人の怒りと、そしてまた、ギリシア側での和解策の不首尾と織り合わされた時点で、はじめて十全に成就される点であろう。というのも、友人のパトロクロスがあえて参戦し、ギリシア軍の敗走のどん底で斃れなくてはならなかったのも、つまるところ、怒りに任せたアキレウスの拒絶に起因したからである。

このようなわけで、『イリアス』には倫理的な設計図があったのだ、と

結論しないわけにはいかない。そうした設計図のすべての細目を明かすには、かなりの研究が求められるし、今は、それだけの余裕もないのだが、たとえ、詩の全体を通して当の設計図をしつかりと跡付けたにしても——それを介して、この詩の芸術作品としてのまとまりを思い描けたにしても——、だからといって、ホメロスの叙事詩がどのように出来上がってきたかという古い問題は、簡単に解消されたり、安易に片付けられるわけではない。もつとも、この詩は単一の倫理的設計図に基づいて作られている、と証明され、これが強く主張されるなら、あまりに分析と解剖に走りがちな昨今の学者根性に、それなりのブレーキはかけられる——これこそ、先の研究の目標でもあった——かもしれない。ならば、この設計図をまとめたのは、どのような設計者であったのか。その点は、あえて詮索するに及ばない。当の設計図が元々の詩の構想に織り込まれていようと、あるいは、のちの詩人の手で挿入されようと、これ自体が目下の作品に現存するのは否定しがたく、しかも、この設計図を理解できなければ、つまりは『イリアス』の狙いとその効果も理解できないのである。われわれは、こうした点をきつちりと弁えておこななくてはならない。

では次に、そのような設計図が盛り込まれている点を、顕著ではあるが数少ない事実に照らして明示しておこう。詩人自らの観点は、『イリアス』の第一巻を紐解くなら明らかであって、そこでは当人の口から、アキレウスとアガ멤ノンの争いは、アポロンに仕える神官クリュセイスへの無礼と、これに対するアポロンの怒りにその端を発していた、と直接に告げられている。ホメロスは、いずれの側にも加担しないで、ただ、争いにおける双方の姿勢をひたすら客観的に説明しているのだが、それでもしかし、双方は、自らの主張をあまりに押し通そうとした点でともに過ちを犯している、とは訴えていた。双方の間には、老賢者のネスト

ルが「ソープロシユネー(節制)」の権化として介在した。この人物は、死すべき人間たちを三世代にわたって眺めてきたから、今や、トラブルに満ちた現時点を超え出た高みに腰を下ろして、あくまでも全時間の立場から語りかけつつ、今の時点の蛮行を何とか和らげようと腐心しているように思われる。ネストルは、ここでの場面全体を釣り合わせる重しの役割を担っていた。ここ、すなわち、この詩に登場する最初の挿話でも、そつと囁かれているのは、アテーテという主要動機にちがいない。アガ멤ノンは、そもそも始めに反則を犯したとき、完全にのぼせ上がっていたし、アキレウスも、第九巻では同様に、アテーテのおかげで盲目となつて「譲るべき術を知らな」かったから、頑なにも自らの怒りにしがみついて、死すべき人間に許された限界を踏み越えてしまった。その結果たるや、まことに散々なもので、当人は——遅すぎたとはいえ——深く懺悔しながら、嘆かわしい盲目について語り、自らの陰鬱な恨みを本心から呪っている。この恨みは、かれに強く働きかけて、託された英雄的使命を台無しにし、ひいては、掛け替えのない親友まで死地に送り出しながら、その間、怠惰な無関心を貪らせたからである。同じくアガ멤ノンも、ようやくアキレウスと和解したとき、寓話を交えた長い演説の中で、アテーテの及ぼす破壊的な力についてやはり不平を漏らしていた。アテーテそのものは、モイラ(運命の女神)と同じく、ここでは完全に宗教的な色彩を帯びて、いかなる人間の強さも、とうていその手を振り解くことの叶わない神的な力として登場している。ホメロスはしかし、他方では——わけでも第九巻で——こうも教えていた。人間は、たとえ自らの運命の主人公ではないにしても、ある意味で、その運命を作り上げる無意識の共同制作者にはちがいない、と。ギリシア人たちは、人間の最高の自己表現は、英雄的な振る舞い、を措いてないと考えていたから、必然的に、人間をうぬぼれさせるダイモンのな力をわけても強く実

感じ、この力が、人間の意思するところと行為するところの永遠の二律背反の底に深く横たわっていると見抜いたのであった。これに比べると、アジアの宿命論的な知恵は、そうした力を前に尻込みして、神の無活動（「単なる見守り」）を賛美し、寂滅を欲する方向に逃避したものと見えるだろうか。『運命』という問題は、まことに長い行程を経てようやくギリシア人に了解されたのだが、そうした行程の出発点は、『イリアス』でアキレウスという人物を生み出したホメロスに、そしてまた、これの終着点は「人間にとつてのダイモンとは、自らのエートス（人となり）を措いてない（エートス・アントローポー・ダイモン）」というヘラクレイトスの格言に、それぞれ求められるにちがいない。

ホメロスの作品の隅々にまで浸透していたのは、ほかでもない、世界の歩みを司る永遠の法と人間の本性の双方を包括的に考察する哲学であつて、それは、人間生活の中にはたらく本質的要素をすべからず見抜いて、誤りなく判定した。かれは、事物の底に横たわる永遠の真理を捉えて、その普遍的知識に照らしながら、あまねく出来事をもあまねく人物をも考察した。ギリシアの詩は、わけても格言を愛したし、個々の出来事を普遍的基準から判定して、普遍から個別を推測する傾向を宿したし、さらには、伝承的実例の数々を普遍的な定型ないし理想として頻繁に用いもしたのだが、そのような姿勢はすべて、ホメロスにその源を仰いでいる。人間生活を当の叙事詩がどう捉えていたかは、アキレウスの盾に描かれた絵——『イリアス』の第一八卷（の四七八以下）に説明されている——が、この上なく見事に物語ってくれるにちがいない。

さて、問題の盾を製作したヘパイストスがその上に描いたのは、大地と、天空と、大洋と、疲れを知らない太陽と、満月と、空をおおう星辰であつた。さらにかれは、見た目も麗しい二つの「人間の都」も描き加えたが、その一つでは、結婚の式典と宴会が催され、婚禮の行列が、松

明を点して街中を練り歩き、あまたの連中が立ち上がって婚礼歌を口にし、少年たちは笛と豎琴の音に合わせて人々の間を踊り回り、婦人たちは戸口に立って、これらすべてを褒め称えていた。市場には、市民たちが群がって、殺された男に償われるべき「血の価格」をめぐって、二人が激しく争い合うのを見守っていた。そこには、磨き上げられた石の椅子が聖なる輪を描いて並べられ、老人たちが着席して、それぞれに、役目のシンボルである布告者の杖を携えながら、順々に立ち上がって評決していた。

もう一つの都は、甲冑を煌かせた二つの軍隊に包囲されていた。かれらは、都を徹底して攻め滅ぼそうか、それとも、略奪ぐらいに留めておこうか、いずれとも決め兼ねていたのである。市民たちはしかし、そのいずれをも是としないで、都の城壁を守るべく、老人たちに加えて妻子をも後に残し、待ち伏せに出発した。そして、待ち伏せの地点——そこは河の傍で、家畜たちの水飲み場であつた——に至ると、それぞれの持ち場に就いて、河縁にいた一群を攻撃した。すると敵は、急いで土手に駆け上り、土手に沿って激しい争いがくり広げられた。あまたの槍が、前に後ろに殺到し、そうした中をエリス（戦いの女神）とキュドイモス（戦争の霊）は縦横に動き回り、ケール（死の霊）もまた、血に染まった衣を身にまとい、死者や負傷者の足を引き摺りながら混戦の中を行き来した。

ヘパイストスはそして、野原もこしらえたが、ここでは農夫たちが、牛や馬を追い立てて行ったり来たりを繰り返して、その向きを換える野原の端には、一人の男が訪れて、かれらに、一杯のワインを振舞っていた。ヘパイストスはさらに、収穫の季節を迎えた莊園もこしらえたが、そこでは、刈り取りに精を出す人たちがせつせと大鎌を動かし、干し草の山を背後に造ると、今度は、束ねる役目の人たちが、それらを束ねて溝車

に積み込んだ。そうした光景を立ち止まって眺めながら、莊園の領主は無言の喜びにひたり、その従者たちは、かなたのオークの樹の下で昼食の準備に余念がなかった。さらにヘパイストスがこしらえたのは、収穫を祝って華やかにダンスが演じられるブドウ畑であり、角をもった家畜の群れや、それを追い立てる人間や犬であり、美しい谷間に開けた牧草地のあちこちに目にされる羊たちや羊飼いや羊小屋であり、若い男女が互いに手を取り合ってダンスに打ち興じ、聖なる吟遊詩人がリュラに合せて歌を口ずさむ舞踏の場であった——これらのすべてから、人間生活のあまねく活動を織り込んだ巨大な絵はでき上がっていた。そして、そうした世界の全体を取り囲むように、大洋が、盾の縁に沿って悠然と巡っていた。

アキレウスの盾に描かれたこのような中身に生命を吹き込んでいたのは、ここにみられる「人間界と自然界の見事な調和」の実感であったのだが、そうした実感こそ、ホメロスの世界把握をわけても強く染め上げていたものにほかならない。一つの偉大なリズムがしつかりと、流動する全体を貫いていたのである。人間的努力を多大に要求する日など、そう何日もなかったから、詩人は、あくまでも余裕をもって、こう語るのを忘れなかった。すなわち、太陽が、人の世の騒動を尻目にいかに昇って沈んでいくか、日中の労苦と戦いにいかに休息がともなうか、夜が、死すべき人間のすべてを抱きしめて、深い眠りの中でその四肢をいかに解き放つか・・・をである。ホメロスは、いわゆる自然主義者でも道徳主義者でもなかった。人生の混沌とした荒波の中で確たる足場もなくただ流し去られたわけでも、その逆に、安らかな観察者を決め込んで、岸辺にじっと佇んでいたわけでもなかった。物理的な力も精神的な力も、かれの目には、等しくリアルな存在であって、かれは、人間の情熱に向けた持ち前の鋭くて客観的な洞察を介して、それがもつ本質的な暴力性

——人間自らのあまねく抵抗を無力化し、当の本人を鷲掴みに運び去る——をしつかりと見抜いていた。そのような力は、しばしば、堤防を越えて自在に氾濫するように思われたかもしれないが、実のところは常に、堤防などをはるかに凌ぐ強い柵でしつかりと統御されていた。究極のレベルで倫理的境界を画しているもの、それは、ホメロスにとって——さらにはギリシア人一般にも——単に人為的な道徳義務の諸規則などではなく、存在そのものの根本法則であった。かれの叙事詩が、他に類をみない圧倒的な影響力を誇っていたのも、まさに、究極の存在を感知することのセンスのおかげであり、世界の意味を察知することの深い認識のおかげであって、それに比べるなら、今日風の単なる「リアリズム」の類いはすべて、ひたすらに薄っぺらで部分的なものでしかないだろう。

ホメロスはこの世の人生を眺めて、それが、普遍的法則の手でしつかりと支配されているのを誤りなく見抜いた。そのゆえにかれは、人を動機付ける技巧の点で右に出る者のいない卓越した芸術家なのである。かれは、ただ黙々と伝統を受け容れたわけでも、さらには、出来事の経緯をそのまま淡々と語ったのではない。かれの手で提示されたのは、自らの内なる衝動に促されて段階的に繰り広げられる、原因と結果がスキなく繋がり合った「筋書き」にほかならない。二つの叙事詩のまことに劇的な語りの部分は、早くもその第一行目から、論理的帰結に向けていささかの淀みもなく展開されていく。「ミューズの神々よ、アキレウスの激しい怒りと、アトレウスの息子アガメムノンとの諍いの模様を高らかに歌ってくれ。かれらを互いに戦わせたのは、そもそも、いかなる神々の計らいであったのか」——この問いは、あたかも矢のように真一文字にゴールへと突き進む。そして、これに続いて登場するのが、アポロンの憤りの物語であって、これを介して、のちの悲劇を招き寄せた本質的項目の数々がしつかりと提供されたのだから、この問いは実に、トゥキユ

『戦史』の冒頭に登場するペロポネソス戦争の原因論と同じく、あくまでも叙事詩の突端を飾っているとよい。しかも、叙事詩の筋の展開は、ゆるやかな時系列にまるで従わないで、ひたすら、納得のいく動機の原則に支配されていた。行為はすべからず、それにふさわしい動因を携えていたのである。

ホメロスはしかし、今日の作家たちのように、あまねく行為をその内側から、すなわち、人間の意識世界の現象という形で眺めようとはしなかった。神の力に助けられないなら、偉大な事柄は一つとして、かれの世界で成就しなかった。物語を口にする当の詩人は、おのずと、全知の椅子に座っていた。今日の作家たちなら、個々の登場人物がひそかに抱く情動のほとんどを、あたかも当人の心に浮かんだものであるかのように語らなくてはならないが、ホメロスはしかし、あまねく人間の活動を、神々の手で導かれたものと公言して憚らない。そのような語り的手法は、どの時点から、単なる叙事詩上の慣例にすぎなくなるのか——この移行線は、必ずしも常に導き出すのが容易なわけではないけれども、だからといって、神々の介入など、叙事詩という様式に固有のトリック以外の何ものでもない、などと捉えるなら、その間違いは明らかであるだろう。ホメロスは、今日のような、理知化された世界——陳腐なもの・常識的なものにあふれ、風景さえも詩的幻影に装われている——の住民ではなかったからである。叙事詩にその顔を覗かせる、神の介入といった事例をつぶさに研究してみると、おそらくは、個々の神々が外的・物理的に行なう時折の介入——叙事詩のごく初期段階に属したであろうモチーフ——がどうしたプロセスをへて、特定の神が連続して偉人に与える内的・精神的な導き——女神アテナが絶え間のない靈感でオデュッセウスを導いたような——にまで発展していったかの内幕が、しっかりと跡付けられるにちがいない。

古えの東方世界では、単に詩のみならず、宗教や政治においても、神々こそは主たる演じ手にほかならないと固く信じられていた。たとえば、ペルシアやバビロニアやアッシリアにおける王墓の碑文には、そしてまた、ユダヤ人たちの預言書や歴史書にも、人間界の行為と不幸のすべてに本当の意味で責任があるのは、神々を措いてないと明らかに記されていた。神々はつねに、人間生活に深い関心を抱いて、あるいは特定の人間を最良し、あるいは自らの権利を主張して、さまざまに加担し介入した。自らに降りかかった善と悪について、さらには、あまねく靈感と成功について本当に責任があるのは、この自分でなく、自分に関わる神の方なのだ、と誰もが理解していた。『イリアス』でも、やはり神々は二つの陣営に分けられていた。これ自体は、むしろ古えの発想であったのだが、それを仕上げる段階で挿入された若干の特徴は、しかしながら、のちの人たちの手になると考えられてよい。たとえば、詩人も懸命に主張しているところの、トロイ戦争を介して天上の世界に生じた反目の数々を超えて、神々が互いに誠実を守り合い、その力を結束する姿や、そうした神の王国がはつきりと実在する点などである。この世の出来事の究極の原因を尋ねるなら、つまるところ、大神ゼウスの意思を挙げるほかはない。ホメロスは、アキレウスの悲劇をすら、ゼウスの意思の成就であったと捉えている。さまざまの神々がたつぷりと招き入れられているのは、個々人の動機のあまねく展開を筋の中で正当化する必要があったからで、これ自体が、普通の心理学的動機に抵触するわけではない。この世の出来事における心理学的局面と形而上学的局面は、必ずしも相互に排除し合うわけではなく、ホメロスはむしろ双方を、相互補完的に捉えて憚らない。

このことは、そもそもの叙事詩に奇妙な二層性を付与することになった。聴衆は、すべての行為を二つの観点から眺めなくてはならない。行

為そのものは、地上と天上の双方で同時進行していたからである。ドラマが演じられる当の舞台は二つの層をもち、われわれも、筋をたどる場合には、人間の意図と活動に焦点を当てたそれと、支配する神々のいっそう高次の意図に焦点を当てたそれ、の双方に気を配らなくてはならない。それによっておのずと曝け出されるのは、人間の行為が、その人間を超えた力の不可解な判定に従わないでは済まない以上、どうしようもない限界性と近眼性を具えている点にちがいない。とはいえドラマに登場する面々は、詩人と違って、自らに課されたダイモンの強制から等しくその目を覆われているのである。もしも仮に、ドイツ語やロマンス語でまとめられた中世のキリスト教的叙事詩を思い浮かべて、それらがいかにか神々を筋の展開に招き入れなかったか、それゆえ、すべての行為をひたすら主体の側からのみ、まさしく単純に人間的な行為としていかに提示したか、を思い出してみるなら、そのような叙事詩が、ホメロスの作品に生命を吹き込んでいる深い詩的なリアリティ感覚からどれほど隔たっているかは、一目にして瞭然ではないだろうか。ホメロスは、神々が、人間の行為と苦難のすべてに密接に関与していると捉えたのだが、この事実は、ギリシアの詩人に強く働きかけて、ゆえにかれらは、あまねく人間の行為と運命の永遠の意味に目を向け、そうした行為と運命をグローバルな世界体系の中に位置づけて、高遠きわまる宗教的・道徳的な基準に照らして判定したのだった。ギリシアの叙事詩は、そうしたわけ、中世の叙事詩に比べると、はるかに豊かでいっそう客観的な人生観を具えていた。ここでも再び、展望の深さという点で辛うじてホメロスに匹敵するのは、わずかにダンテぐらいであろうか。ホメロスの叙事詩は、のちにギリシア哲学として見事に開花していく要素のすべてを含んでいた。そこにはつきりと目にされるのは、ギリシア思想に固有の人間中心の姿勢であって、この姿勢は、東方世界の人びとが奉じる具体

神的(テオモルフィック)な哲学とわけても強い対比を示していた。東方世界では、神こそが唯一の役者であって、人間は、そうした神の役者活動に用いられるべき単なる道具的対象でしかなかったからである。ホメロスはしかし、人間とその運命を、しっかりと舞台の前面に据えて憚らない。もつとも当人は、それらを「永遠の相の下に(スプ・スペーキエ・アエテルニターティス)」、すなわち、わけても高遠な普遍的理想と普遍的問題の角度から眺めていたのだけでも・・・

叙事詩の構造に具わったこのような特徴は、『オデュッセイア』の中で、『イリアス』以上に強く目にされるにちがいない。『オデュッセイア』は、自らの信仰の数々を理路整然と体系化した時代の作品であって、われわれが手にしている叙事詩は、少なくとも、そうした時代に完成され、そうした時代の印をくつきりと刻んでいた。トロイの民とギリシアの民が交戦して、ともに、祈りや供物を捧げてそれぞれの神に助けを仰いだとすれば、その場合にしかも、そのような崇拜者たちが、神の全能とその公平無私を固く信じていたとすれば、神々は、かなりつらい立場に身を置かないわけにはいかない。そのようなわけで、神的な力はあくまでも知的で不可分なのだといった理想と、神々のほとんどは局所的で特殊化された神力でしかないという従来の神概念を、何とか折り合わそうと多大の汗を流しての悪戦苦闘は、むしろ『イリアス』でも、それなりに跡付けられないわけではない。この作品では、道徳的・宗教的な信仰もかなりの進歩を遂げていたからである。ギリシアの神々は、まことに人間臭くて、われわれ人間にかなり似てもいた。ギリシアの貴族たちは、われこそは神の家系に属すると意識して、それを大きな誇りとしていたから、神々のみせる人間臭い特徴に促されて、天上における神的な力の生活と活動も、地上で営まれる自分たちの生活とそう異なるわけではない、と想像した。このような発想は、それに続く時代の抽象的で理想主

義的な哲学の手でくり返し攻撃されたのだが、早くも『イリアス』のいたる処で、天上における神的な力をめぐる——なかんずく至高の神をめぐる——深く宗教的な観念にその場所を譲りつつあった。そして、のちのギリシア芸術や思想が大々的に口にするこの上なく気高い理想の数々は、実に、こうした観念から芽吹いたのである。もともと、神々の力をめぐるいつそう論理的で首尾一貫した見解を目にしたいのなら、やはり『オデュッセイア』を待たなくてはならない。

『オデュッセイア』の第一巻と第五巻の冒頭に登場する「天上の会議」という発想は、いうまでもなく『イリアス』から借用されているが、『イリアス』における「オリュンポスでの騒がしい口論」と『オデュッセイア』における「人間を超えた神々の荘厳な会議」の間には、明らかな差が認められるのではないだろうか。『イリアス』に登場する神々は、ほとんどが明らかに人間臭くて、たとえば大神ゼウスなら、物理的な暴力に訴えて自らの主権を力説したし、ある神なら、まことに人間臭い手段を用いて他の神を、あるいは欺き、あるいはその力を無化したからである。しかるに、天上の会議を主宰する『オデュッセイア』のゼウスは、高度に哲学的な「世界の良心」の人格化にほかならず、かれは、オデュッセウスの運命に言及する際にも、まずは、人間の苦難に深く関わった、人の手で犯される過ちと運命の密なる結び付きをめぐる一般論から話を進めている。この詩の全体は、人間に向けた神からの関わりの諸々を正当化する——という同一の意図で満たされていた。至高の神は、死すべき人間のあまねく思いや努力を超えた、まさしく全知の存在なのだ——これが、つまりは詩人の把握した核心であった。そうした神は、あくまでも精神的な力であって、その本質は「考える」という一点に絞ることができた。この力はしかも、あの盲目の情念——人びとに罪を犯させ、アテアの網に絡み取らせる——など、及びもできないまでに優れていたのでは

る。オデュッセウスが味わった辛酸の数々、その妻に言い寄る求婚者たちの傲慢さ（ヒュプリス）……そうした物語の全体を支配していたのは、まさしく、上にみた道徳的・宗教的な理想であった。求婚者たちの横柄は、それゆえ、自らの死で償うほかになかったのである。このように、問題自体ははっきりと提示され、ここにみたのと同じ発想の下に、ひたすら終局へと突き進んでいった。

物語の全体を支配して、最後には正しくて幸せな帰結にまで導いたのは、いうところの「神の意思」であつたけれども、そうした意思是、物語が危機を迎えた時点でおのずと姿を現わし、自らの首尾一貫性と全能性をいささかも裏切らなかつた。というのも詩人は、物語に登場した出来事のすべてをしつかりと整理して、自らの宗教的信条に無理なく折り合わせたからである。すべての登場人物は、それゆえ、ピタリとその場に収まって、余分なものなど認められなかつた。そのようにスキなく組み立てられた倫理的構想は、おそらく、『オデュッセイア』の最終段階でわけても著しく目にされるにちがいない。そうした構想が、どのようなプロセスをへて、オデュッセウスをめぐる伝承的冒険譚の昔版に押し付けられたか——この点については、ホメロスの注釈家たちも、いまだ十分に解き明かしてはいない。われわれが手にしている最終版の全体は、ここにいる宗教的・倫理的な基本構造でしつかりと固められていたが、そうした構造に並んで、当の詩には、ほほえみを誘う小モチーフ——田園詩、英雄物語、冒険譚、妖精物語の類い——も数多く含まれていた。とはいえ『オデュッセイア』の力の源は、むしろ、そうした小モチーフにあつたのではなく、この作品は、道徳的・宗教的な中心問題を幅広くかつ包括的に展開していたからこそ、中心構造も簡潔なまとまりを保つて、あらゆる時代の称賛を博したのであつた。

ここまでのところ、「彼方にまで及ぶホメロスの影響」のほんの一面の

みを取り上げられて、それなりに語られたにすぎない。ホメロスは、人間と国家の命運に、しっかりと整った倫理的宇宙の中でふさわしい位置を割り当てたけれども、それと同じく、自分の作品に登場する面々にも、当人たちにふさわしい世界を具体的に用意した。描かれているのは、単に抽象的な人間とか、精神のみの人間などでなく、男にせよ女にせよ、あくまでも血の通った生身の人間にほかならない。そうした人間は、目立ったグループを結成するか、あるいは、大げさに振る舞ったのち、パタリと動きを止めてしまう。人形まがいではさらさらなく、自らの生命をしっかりと具え、その振る舞いも真に迫っていたから、当人たちの姿を直かに見て、直かに触れているかのような錯覚に陥らせたほどである。かれらの行為は釣り合いがとれ、その生活も、現実世界で営まれているのと何ら矛盾しなかった。たとえばペネロペを考えてみよう——かの女は、当然ながら（ドラマの上で）、もつと激しい興奮を表明してしかるべきだったし、もつと激しい喜びや悲しみの仕草に駆り立てられて問題はなかったのに、長い詩の中で、当人自身も、さらには聴衆もまた、そのような行き過ぎをとうてい支持できなかった。ホメロスの作品に登場する面々は、つねに自然体で振る舞って、いつの間でも、自らの本性のすべてを曝け出したから、われわれも、隠しようのない丸々の形でその姿を思い描けたのだが、それは、比較を絶した生地の詳細さと快活でしっかりと飾られていた。たとえばペネロペは、自室では主婦として、また、無礼な求婚者たちの間では孤独な妻として、行方の知れない夫の無事をひたすらに祈った。かの女はさらに、正直ながらも忠実とはいえない召使連中を束ねる女主人であり、大切な一人息子の母親でもあった。そして、老齢の正直な豚飼いとオデュッセウスの父親——やはり老齢で腰も曲がり、町から遠く離れた郊外で、小さな庭園の世話にせつせと汗を流していた——を除けば、いかなる支え手にも恵まれなかった。かの

女の父親も、あまりに離れていたから、とうてい当てになどならない。およそこのように、すべてが単純かつ論理的であった。かの女の性格は、あらゆる面で実生活に密着し、ゆえに、静かではあったが有無を云わさぬ力で、リアルな彫像の全体を形造っていた。ホメロスは、世の数学者が「点」を幾何学体系に座標づけるのと同じく、明晰かつ正確に、すべての登場人物をその境遇に位置づけたけれども、ほかでもないこの才能に、当人の彫像力の秘密は求められてよいかもしれない。

ホメロスは、それ自体で完結した独立のコスモス——要するに、さまざまな変化や偶然が、秩序と安定の手でつねに程よいバランスを保っている世界——を創り出したけれども、それを可能にしたのは、つまるところ「形象をいつそう明確にしたい」と生来の情熱を燃やすギリシア精神にほかならない。今日のわれわれは、ホメロスを研究するにつれ、どうしても驚かないではいられない事柄を目にするのだが、それは、ギリシア史を貫いて繰り返されてきた傾向——「固有にギリシア的」と称されてよい力——のすべてが、当人の作品中にすでにその顔を覗かせている点であった。このことは、むしろ、かれの詩だけを単独に読んだだけでは、そんなにはつきりと浮かび上がってこない。けれども、ホメロスと後のギリシア人たちを幅広く概観したなら、どうしても、双方の底に横たわる精神の同一性を目を留めないわけにはいかないのである。このような同一性の最も深い基盤は、つまるところ、遺伝と血と民族の三者に行き着くのかもしれないが、それらは、いまだに明かされない大いなる秘密に属している。とはいえ、ここに目を向けるなら、当の三者が、われわれと非常に似通っている反面、われわれと根本的に掛け離れている点も、しみじみと実感されるのではないだろうか。われわれは、ギリシア世界と交流してさまざまな利益を手にするが、本当の利益はおそらく、同じ種に属するメンバー間でも、そのような差は必然的に認められ

なのだ、という了解にちがいない。民族とか国民性などの要素は、いわゆる論理よりはむしろ直観で捉えられるのだが、これ自体は、いかに精神が歴史的変容を遂げようとも、また、いかに運命が栄枯盛衰をくり返そうとも、奇妙な不変性を保ちながらひたすらに作動の手をゆるめない。こうした要素に思いを巡らせるにあたって過小評価されてならないのは、ホメロスの手で創り上げられた『まっただき人間の世界』が、のちのギリシアにどれほど測りがたい影響を及ぼしたかの点であろう。そうした世界は、汎ギリシア的な精神が生み出した最初の作品であって、これを介してギリシア人たちは、はじめて『われわれは一つの国民なのだ』と自覚できたから、それは、のちのギリシア文化のすべてに消しがたい刻印を記した、と称えられてしかるべきかもしれない。

訳者あとがき

ここに紹介する和訳は、W・Jaeger, PAIDEIA — Die Formung des Griechischen Menschen の英訳として有名な G・Highet, PAIDEIA — the ideals of Greek culture —, Oxford, 1939 をテキストにしている。

イエーガーを和訳する際に、独文特有の圧縮性と抽象性に本気で手こずっていたわたしは、この英訳の意識性と具体性にどれほど助けられたか分からない。ハイエットの英訳は、いわゆる訳本の域を超えて、それ自体が、見事に完結した一個の読み物であった。

大学における外書講読のテキストに、たまたまこれを選んだ経緯もあって、教室での講読に合わせて、あえて和訳をパソコンに入れてみたのだが、改めて読み返してみると、独文の原典訳とは違ったストーリーの滑らかさが目に付いて、比較の意味でも、思い切って『紀要』に投稿することにした。

同じ中身ながら、著者が変われば、こうも全体が『様変わり』するものだろうか。訳文自体が原典を超えることは、まず見られないものの、双方がしかし、限りなく接近する事態ならあながち皆無ともいえないだろう。そうした数少ない例外の一つが、ハイエットの英訳にちがいない。

今回は、紙数の制約もあって、「教育者としてのホメロス」のみを掲載することにした。

(本学文学部非常勤講師)